



上映映画解説

1954, 3~4

国立近代美術館 フィルム ライブラリー

No. 19

Addio Giovinezza

特別映画鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を毎水曜日に開催しております。今回はその第九回として、前回のイタリア史劇映画に引き続き、無声時代のイタリア現代劇映画の代表作「さらば青春」をとり上げました。

「さらば青春」は無声時代に三回映画化されていますが、今回上映のものは、その中最も有名な一九一八年の作品です。これは我が国では一九二一年(大正一〇)年一〇月七日から浅草キネマ倶楽部で封切され好評を博しましたが、その後一九二五年にも新版を再輸入、同年一二月新宿武蔵野館で上映されました。今回上映のプリントは、その再輸入の時のものです。

さらば青春

七巻
一九一八年イタリア映画

原 作……………ニノ・オクシリア嬢
……………サンドロ・カマジオ氏

脚 色・監 督……………アウグスト・ジェニナ氏
……………ジョヴァンニ・トマティス氏

映 影……………ジョヴァンニ・トマティス氏
……………ジョヴァンニ・トマティス氏
……………ルゲロ・カポダリオ氏
……………ルゲロ・カポダリオ氏

原 作……………ニノ・オクシリア嬢
……………サンドロ・カマジオ氏

映 影……………ジョヴァンニ・トマティス氏
……………ジョヴァンニ・トマティス氏
……………ルゲロ・カポダリオ氏
……………ルゲロ・カポダリオ氏

Adaptation and Staging by Augusto Genina,
Operator: Giovanni Tomatis.

この映画について封切当時のキネマ旬報第八一号(一九二一年一〇月二日号)は次のように記述している。

【略筋】笈を負ふてチェーリンに東上し、やがて大学に入った才貌兼備の青年マリオは己が下宿屋の娘ドリーナと互に恋ひ慕ふ身となつた。此処に衷れを止めたのはマリオの友で少々お目出度いレオネである。彼は二人の陸しを見て、或は感服し、或は羨み、或は己が身を顧みて私に嘆息するのであつた。しかし或時忽然と姿を現した怪しく美しい婦人エレナは業にマリオの心を捕へた。之が原因で、マリオは住家をかへ、ドリーナと別れて一心に試験に身を入れた。やがて満点でパスしたマリオが故郷に帰る時は来た。その時である。マリオが再びあの懐かしかつたドリーナの事を想つた。マリオに去られても尚マリオを愛してゐるドリーナは此時ボンヤリマリオの門辺に入りもやらザインでゐた。恋人の二人が再び相擁した時、女は泣いてせがんだ。「いつちやいや〜」と。併し男はどうしても国へ帰らねばならない。重苦しい列車は冷い轍の響を残して、断腸の二人の若人を次第次第にとへだてるのであつた。恋よさらば、嬉びよさらば、さうして青春よさらば。

イタリア映画について

——無声時代を中心にして——

イタリアでは大体一九〇五年頃から映画を作り始め、一九〇八年になつて急に盛んになつた。その頃フランスでは、ある意味で芸術的な意図の下にであつたが、字幕の多い退屈な文学的映画が多くなり、他方世界各国における映画の社会的地位が高まり、各国で映画が盛んとなり、フランス映画の黄金時代が潰えたが、他

の国々の中イタリア映画が最も盛んになつた。イタリアは、史劇を好む国民性と、史劇の舞台となるローマ時代を歴史に持つ伝統から、フランスでも多かつた史劇映画を引き継ぎ、「ボンベイ最後の日」(一九〇八、一三)「クオ・ヴァーデイス」(一九一三)等の大作が数多く作られ、イタリア映画の黄金時代を招来する一つの原因となつた。かくて一九一四年頃までが大史劇全盛期であるが、当時イタリア第一の文豪ガブリエレ・ダンヌンツィオのオリジナル・ストウリイによる「カピリア」(一九一三)はこの期の代表的作品である。

イタリア史劇映画は、ロケーションの美しさを認識させたこと、シヨットを沢山作ることから編集という映画の最も根本的な仕事が必要視されるようになったこと、イタリア人の柄の大きな演技が史劇に向いていくことからアクションに変化が出て来たこと等、これらの性質によつて一九〇八年から第一次大戦中を経て戦後まで世界の映画界をリードして来たのである。

イタリア映画は、現在でも史劇映画が盛んでありながら、一方ではロッセリーニやデ・シカのようなプロレタリアの生活を描いたものもあるというように、元来非常に両極端なものをもつ性質があり、この二元性がイタリア映画のあらゆる場合に見られる重要な特徴といふことが出来るが、一九一〇年代において史劇映画と並んで現代劇映画に大きな特色を示した。

この時代の現代劇映画は、数多くの作品を生んだが、これらの作品を二つの傾向に大別することが出来る。その一つは、この「さらば青春」にも見られるような、庶民生活を描いた写実的な傾向である。この流れを代表する作品には、「シチリアの血」(一九一一)「闇に落ちた人々」(一九一四)等がある。後者はナポリの貧民窟の生活と貴族の豪華な生活を対比させて写実的に描写したもので、フランスの映画史家ジュール・サドウルはこれを現在のネオリアズモ映画の先駆的作品と解釈し、一般にも承認されている。他の一つの傾向

は当時の現代劇の大部分に見られるもので、非常にロマンチックな題材をとり、貴族や芸術家を登場人物とする通俗的な意味で高級な、アリストクラチイ的な感じのする傾向である。この流れを代表するものは、ピイナ・メニケルリ主演の「火」(一九一四)で、画家と侯爵夫人の恋愛を描いた徹底的にロマンチックな作品である。このほかジェンナ・ロリゲルリの傑作「過去よりの呼声」(一九二二)は、写実的な傾向の中で「さらば青春」等に比して、アリストクラチイ的な感じのする作品である。

しかしながら、これら二つの傾向に共通した現代劇の大きな特色はドキュメンタリの傾向である。これは現在のネオリアリズモにはつきり出ているが、イタリア映画がはじめから持っていた傾向ということが出来る。例えば「さらば青春」の随所にロケーションが見られるが、これは当時豪華なセットを得意としていたイタリア映画の事情から考えて、経費の点からなされたものではないと思われる。サイレント末期からトリーキーにかけて第二次大戦中までに日本で見られた数少ないイタリア映画の中で、優れたものはドキュメンタリ的な要素のおおいものであつたこと等を考え合せると、このドキュメンタリの傾向はイタリア映画が絶えず持っていた一大特徴ということが出来る。

このほか現代劇の特色としては、大女優が現代劇の中心になつていたことに觸れねばならない。ピイナ・メニケルリ、フランチェスカ・ベルティニ、マリア・ヤコビニ、エスベリア等の肉体的にも豊かな名女優の存在に男優は可成り影が薄いものであつた。又この時代のな悲劇的なセンスにおけるイタリアと日本との類似、氣質の共通性も忘れてはなるまい。サンチマンタルというよりもつと激越な新派悲劇的なものをイタリア映画は持つている。現在のネオリアリズモの作品でさえも、不幸な人々の味方である点で扱ひ方は違つて考えようによつては新派悲劇と連関性があるように思

われる。この氣質の共通性は、善悪は別として現在でも我々がイタリア映画を見る場合一つの特権となつており、日本映画がイタリア映画から影響を受け易い條件を生んでいる。

最近イタリア映画では、史劇と並んで新派悲劇的な現代劇が盛んで、それ自体一つのレジスタンスであつたネオリアリズモの映画が下火になりつつある傾向が見られるが、この悲劇的要素をもつ現在の映画を觀賞する際に、「さらば青春」時代の現代劇と比較する事は、色々な意味で興味がある。

なお、無声時代のイタリア映画を見る場合に注意すべき点は、表情の動きや手足のジェスチュアすべてが具体的に視覚化することを旨として作られた映画であることを念頭におくべきである。元来ラテン系民族特にイタリア人は非常にジェスチュアが多く表現的であるから、他国人は自然な日常生活の露発を演技だと思ひ込むことが多い。封切当時この我々には大げさだと思われた身張りについて「くさい」と評されたが、この「さらば青春」はイタリア映画としても、又当時のアメリカものと比較しても、極く自然な感じがする方である。メークアップも舞台化粧そのまま目下が隈取りのように見えるが、現在のようなメークアップはアメリカ映画の影響によるもので当時はまだ見られない。当時の映画が何を描こうとしたか、それを考えることが、映画の古典を觀賞するのに望ましい態度と思う。

(フィルム・ライブラリー運営委員——飯島 正)
前文は飯島委員の講演の要旨を再録したものです。

* * * * *